

ふたごたちの思い、お母さんの思い

先日、ある機会にふたごのお母さんから質問がありました。その方は、ふたごの育児が大変で、どうしても一つ一つのことに十分に手がかけられないので、言ってみれば育児が粗末になってしまい、子どもさんの心の傷になってしまうのではと心配されていたのでした。僕はふたごの一人として、決してそんなことはないと申し上げました。平均的な苦勞をしているふたごの家庭の精一杯の努力の中でしている育児によって、大きな心の傷になるようなことはありません。第一、ふたごは両親が一生懸命育ててくれることを知っています。もちろん、単胎で生まれたお子さんの育児と比べると手塩にかける時間は少ないし、やり方も違ってくると思います。でも、忙しい中で最大限の努力をしていることは、必ずお子さんたちには伝わります。僕たちの両親も忙しかったですが、僕たちは感謝こそすれ、決して恨んだりはありません。第二に、子どもというものは、意外に丈夫に出来ています。僕も自分の子どもたちを育てて思ったのですが、人間という生き物はタフです。かと言って、乱暴に粗雑に扱うことを勧めているわけでないことは、皆さんもお分かりのことと思います。しかし、余りに腫れ物を扱うように育てたのでは、子どももひ弱に育ちますし、こちらが参ってしまいます。少しぐらい手を抜いたって（抜かざるを得ないのですが）、子どもさんたちはぐんぐん育ちます。第三に、最近「トラウマ」「トラウマ」と口にし過ぎるきらいがあるような気がします。乳幼児の体験がずっと心理的な傷となって、後々の人生や成長を規定してしまうことはあります。でも、こうした傷は、日常の精一杯の育児の中で合理的に工夫をしているような事柄で生じるものではありません。むしろ、傷つけまい傷つけまいと神経を使い過ぎるほうが、心的ストレスになって、お子さんにもつらく当たってしまったりする危険があるように思います。本来は、「トラウマ」と呼べないようなことまで、「トラウマ」「トラウマ」と言い過ぎるようです。

実は、僕の母は今までに僕の前で三回涙を流しました。一回目は、僕たちが小学校のとき、父が倒立の模範演技をしようとして足を振り上げたときに、その足が母の顔面をもろに打ったとき（無茶苦茶痛そうでした）です。二回目は、妻が自分たちもふたごがほしいといったとき。母は、「あんたたちはふたごを育てるのがどれだけの苦勞なのかわかっていない」と泣きながら怒りました。それを聞いた僕は隅のほうで小さくなってしまいました。苦勞の張本人の一人だからです。三回目は、何かの機会に突然、母が「自分はおまえたちの世話が十分に出来なかった。厳しくし過ぎた。ごめんよ。ごめんよ」と言いながら、文字通りわ〜んわ〜んと大声で泣いたときです。僕は、大人もこんなに幼児のように泣くものなんだとびっくりしたと同時に、母はそんなことを心の奥底に抱えていたんだとショックでした。そして、自分の子どもにするように母の頭をよしよしとなでながら、「そんなことは決してないよ」と慰めたのでした。実際、両親たちの育児を不十分だと思ったことはありません。それは世のふたごたち共通の思いだと思います。だって、ほとんどのふたごが自分はふたごに生まれてきてよかったと思っているのですから。「もう一度ふたごを育ててみたいですか?」という質問に対して、「もう勘弁して」と答える方がまだ多いお母さんたちには本当に申し訳ないのですが、僕たちふたごはほとんど「もう一度生まれても、ふたごになりたい」と思っているのです。お母さんたちと比べると、なんだかずるい感じですか?